

スタッフエッセイ 12 NO166(2007.02.17) ~ 180(2007. 04.20)

166	副業：ウェイトレス	田房絢子	2007.02.17
167	ひとつの命	芳賀 慈	2007.03.02
168	「希望」	亀貝一義	2007.03.08
169	帝国オッサンの逆襲!?	木村良太	2007.03.13
170	「早いものです!？」	杉野建史	2007.03.19
171	マイブーム?	田房絢子	2007.03.19
172	「頑張って」と「ありがとう」	畑中紀世彦	2007.03.24
173	見る前に走る春	新藤 理	2007.04.01
174	寂しさと次の一歩	杉野建史	2007.04.03
175	学園の新しい体制	亀貝一義	2007.04.04
176	教師の評価	杉野建史	2007.04.05
177	江原啓之	芳賀 慈	2007.04.06
178	スタッフエッセイを書く	椎名結実	2007.04.14
179	挑戦者	田房絢子	2007.04.19
180	「初めての...」	杉野建史	2007.04.20

166 副業：ウェイトレス 田房絢子 2007.02.17

4年前の7月からウェイトレスをしている。店の名前は「日曜喫茶」。その名の通り、日曜日にしか営業しない。しかも月1回。メニューはコーヒーのみ。店舗は、とある農家の片隅。

誰もが愛する絶妙な深みとまるやかさを出したコーヒーを、マスターが事も無げに淹れていく。それを私が運んでいく。夏は青空の下で、冬は薪ストーブや石炭ストーブの周りで。開店初期の頃からのお客さんとは気心が知れたもので、何の気なしに喋る時間がゆっくりと流れていく。周りでは犬やニワトリ、ウサギが時折走りすぎ、少し歩けば山の恵みが溢れている。都会の喧噪から解き放たれる、極上のひとときである。そこでは自然と人間と一緒に暮らしている。大地の恵みを受けながら、少し大地を借りながら。

何気ない時間だけれど、私の中に大きな存在を占めているこの日曜喫茶。質素なものの中に、都会では知りえなかったものを見つける。赤い木の実に心を躍らせ、ゴボウの甘みに感動する。空の大きさに心を奪われ、命の儚さを思い知らされる。

普段の都会慣れた生活からちょっと逃げたいとき、たまに私はそこへ行く。必ずそこには、温かく迎えてくれる笑顔が待っている。今度は私がマスターとなり、絶妙な深みとまるやかさに欠けたコーヒーを振る舞う。「愛情が入りすぎるから、こんな味になるんだね」と笑いながら

167 ひとつの命 芳賀 慈 2007.03.02

ひとつの命のお別れの式に参列した。お世話になっている方のご尊父である。少し前から病状が思

わしくなく、家族の必死の看護の様子を伝え聞いていたので、訃報を聞いてとても悲しくなった。前日にご尊父を亡くされたというのに、何とその方はいつもの時間に教室に現れ、生徒に授業をして帰っていった。後からその事実を聞いて、私は言葉を失った。それまでも深刻な状況の中にありながら、生徒たちとの時間を大切に考えてくださっていた。限られた時間をきっと一緒に過ごしたいだろうと想像しながら、毎週厚意に甘えていた。

昨年他界した祖母が、小学生の私にこう言ったことがある。「仏壇のろうそくの火が揺れるのは、仏様が喜んでいる証拠なんだよ」

聞けばお年もまだまだ若く、残されたご家族の心中を思うと、かける言葉も見つからない。今はただ、時間が心を癒してくれることを祈るのみである。

祭壇の大きなふたつのろうそくの火は、交互に激しく揺れていた。

168 「希望」 亀貝一義 2007.03.08

私が(多分他の誰もが)好きな言葉に「希望」とか「夢」がある。そしてこの言葉を聞いたときに、私はほとんど昭和20年代から30年代を思い出す。このころ、希望は誰もが全く違和感なく特に「旅立ち」の時には共有することのできた心だった。

ところが今の時代どうも「希望」は違和感がありそうだ。そんな気がしていたが、先日読んだ村上龍氏のエッセイ集「蔓延する偽りの希望」の中に次のような文章があった。

「敗戦直後の焼け跡には食料も産業的インフラもなく希望だけがあったのだろう。希望を胸に、日本人は死にものぐるいで働いてきて、ついには希望を消費し尽くしてしまったのではないだろうか。日本という国民国家がトップダウンで民衆に配給してきた希望はついに不要のものとなり、消滅したのではないか」。そして村上氏はこのエッセイの最後を次のように結ぶ。「今、希望は必要ではないのかも知れない。なぜなら希望は宗教的教義以外、常に曖昧なものだからだ」と。

実に多くの人が「夢」の意味を説き自分の「夢」を語る。逆説的にいえば、夢を持つことはいくほど簡単なことではないからかも知れない。そしてこの夢はだいたい「将来 になる」といった類である。の中に自分の好きなものを入れるといい。スポーツ選手でもリッチでも医者でも、その他何でも。

昭和2,30年代(団塊の世代との関係で言われるが)日本中掃いて捨てるほど在った希望とはそういうものだったのだろうか。どうも少し違う気がする。ひょっとしたら「自分が幸せになることはみんなが幸せになるのだ」といったようなものだったのではないだろうか。「オレだけ、私だけ」の世界ではなかったような記憶がある。「自分だけ になるう」ということが「正しい希望」でないようだ。ホリエモンさんを思い出そう。自分だけの希望は他人の不幸になりかねないことを知っているから、「希望」に違和感が生まれるのではないか。

だからまさに「みんなの幸福」につながるような希望を、心ある人たちは模索しているのではないかと、言う気もするのだがどうなのだろう。

169 帝国オッサンの逆襲！？ 木村良太 2007.03.13

部屋の本棚に身を隠し、それでいながら私の心をとらえてやまない存在がいる。それは、グフ(のプラモデル)。青いボディのヤツは、かの有名な「機動戦士ガンダム」(今に言う「ファースト・ガンダム」)に登場するジオン公国軍陸戦用モビルスーツ。まだ組み立てられてはいないが、間もなく私の手によりその雄姿を見せることになるはずだ。

私は以前から青い色と格好いいオッサンが好きなのだが、この両方の好みを同時に満たしてくれるもの一つがグフなのだ。と最近気付いた。格好いいオッサンとは言うまでもなく、グフの最初のパイロットであり、「青い巨星」と呼ばれたランバ・ラルである。

さて、このグフが私に語りかけてくるのである。「早く私を完成させるのだ」と。何度も。なぜ、そんなに急かすのか。ある時しばらく考えていると、卓球の石川佳純選手の活躍を伝えるテレビニュース

が。「中学2年生の彼女とランバ・ラルとでは、ひどく対照的だな」と思うと同時に、ある考えが頭に浮かんだ。若手アスリートの台頭に危機感を募らせた帝国オッサンが、逆襲に出ようとしているのではないか…。

確かに帝国オッサンは、昨年の学園祭でボラレンジャーによって「オッサン化計画」の進行を阻止されてしまっている。だが、それぐらいで諦めるようなオッサンではないはずだ。そういえば若手ばかりではなく、世のオッサンたちも一方で頑張っているのではないか。私が最も尊敬するスポーツ選手であったバレーボールの楊成太・現NECブルーロケッツ監督(41)が、6年ぶりに選手登録したということには、かなり驚いたものだ。

帝国オッサンには、ランバ・ラルの信奉者が多い。彼の生き様そのものがオッサン魂の現れであるからだ。かつてはオッサンの手先であった私自身、ボラレンジャーの若さ溢れんばかり！の踊りに一度は若さを取り戻してしまっただが、最近はまだ「オッサン化」しているなぁと感じることが多い。ベテランのアスリートが頑張っていることと関係があるように思えてくる。グフのプラモデルを完成させた時、私の中にオッサン魂が甦る？帝国オッサンの逆襲は、もう始まっているのかもしれない。

170 「早いものです!？」 杉野建史 2007.03.19

2007年が始まり早くも3ヵ月が経とうとしている。そして、2006年度があとわずかで終わろうとしている。

学校は4月始まり3月終わりを1スパンとしているので、新年を迎えてしばらくすると年度の終わりを迎える。暦の上での1年を終える時よりも“年度”を終える時の方が数十倍忙しい。日本全国の学校関係者の方々は猫の手も借りたいほど忙しい毎日を送っていることだろう。我が学園もそれに漏れず、目の回るような忙しさである。肉体的よりは精神的に追い込まれる感じである。

先日3月4日に高等部の第3期卒業式を終えた。静粛な空気の中での証書授与。在校生と卒業生、参加して頂いた父母やフリースクール部の生徒とが一緒になって楽しんだ第2部。卒業生父母からの感動的なお話を頂いたり、卒業生担任からのメッセージで涙したり第3部。……と、感動に浸るまもなく年度末試験や、卒業するはずの3年生の最後の補習。めでたく卒業したはずの生徒達が毎日のように登校してなにやら活動している。卒業とは「一区切り」のはずでは…??

卒業生も保護者も「早いものでもう卒業です」としきりに口にしていた。担任のTさんは3年間継続してクラスを担当した。卒業生本人や保護者の方々よりも“早く!?”感じたかもしれない。しかし、決して「あっというまの3年間だった」とは言えないはずである。なかなか登校できない生徒を抱えて、試行錯誤の毎日。保護者との連絡や生徒との面談。教師であれば当たり前のことであるが、その当たり前のことをきちんとできる教師であるTさんに心から「おめでとう」をおくりたい。Tさん「早いものでしたか??」

あっ、まだ第2回卒業式が控えていますね!

171 マイブーム? 田房絢子 2007.03.19

先日、写真を撮るために旭山動物園にいった。新しく購入したカメラをただ使いたかったのもあるけど、どうしてもしろくまのイワンに会いたかった。ほかの動物も見てもわるけど、やっぱりしろくまが一番好きだ。でも、ふと気が付いたんだけど、うろちょろ歩いているだけのしろくまたちは好きではないなぁ。なにが気に入ってるかって、水の中にいる彼らが好きらしい。今現在のマイブーム。

マイブームというのが人にはあって、なにがきっかけかはわからないけど、時期によってハマルものがある。でも少し経つと、悲しいくらいに颯爽と過ぎ去っていく。飽きっぽいのかなぁと自分に問いかけつつ、時期がくるとまた何かに夢中になったりする。ブームって、意味としては「にわか」な

ものだから、マイブームという言葉自体、長期的な意味では使われないうらさうか。いつも思うけど、
一体こういった言葉は誰が作っているらさうか。

飽きずに長い間、一生懸命好きなものってならさうか？思いつかない自分がちょっと悲しかった

172 「頑張って」と「ありがとう」 **畑中紀世彦** **2007.03.24**

先日 NHK の番組で、過去に何度もベストセラーを出した著名な作家が「頑張って」は決して良い言葉ではないと発言していた。頑張っている人に対して、軽はずみに頑張ると声をかけ、これ以上頑張らせてどうするのかと。この意見は幾度が聞いたことがある。確かに、そういった相手に対してかける言葉は選ばなければならない。でも、「頑張って」という言葉をそこまで突き詰める必要性があるらさうか。まして社会的に影響を及ぼす人が、こんなことを軽はずみに言って欲しくないなあと思ってしまう。(TV 上の編集で、クローズアップされていたのかもしれない)

「頑張って」は、「おはよう」や「ありがとう」などと同様にごく日常的に交わされる言葉だ。しかし、この日常の会話が人と人をつなぐ大切な意味を持つ。「頑張って」と応援してあげたい人がいて、「ありがとう」と応える人がいる。この何気ないコミュニケーションこそが、人間らしい関係を生み、築いていくものではなからさうか。

簡単に思いを伝えられる携帯メールで、この「頑張って」や「ありがとう」は、まるで日常の挨拶のように私が最も多く送信したメッセージらさうか。たとえ挨拶のようなものでも、私自身これまでにこれらの言葉にどれだけ支えられてきたらさうか。新しい一歩を踏み出す今もどれだけ勇気をもたらしたらさうか。「頑張って」と「ありがとう」、この単純かつ明快に相手にエールを贈り、感謝を表すことができる何気ない言葉が私は大好きだ。

皆さんこれからも「頑張って」下さい。そして今まで「ありがとう」。

173 見る前に走る春 **新藤 理** **2007.04.01**

この気もちはならさうか

目に見えないエネルギーの流れが

大地からあしのうらを伝わって

ぼくの腹へ胸へそうしてのどへ

声にならないさけびとなってこみあげる

(谷川俊太郎『春に』より)

フリースクールの「新しい旅立ちの集い」を終えて、父母との懇親会場へ向かう。まだ片づかない学園をとりあえず大あわてで後にして、小走りで向かう。毎年芳賀さんと「もう少ししんみりするヒマがほしいですなえ」と言い合うこの時間、今年はずっと同じセリフを金澤さんがつぶやいていた。「...それ、毎年言ってるんです。」苦笑しながら、まだ走る。

卒業する生徒たちは、受験勉強や文集づくりの合間をぬって、合唱の練習にも励んでいた。谷川俊太郎作詞・木下牧子作曲の『春に』。卒業する生徒たちとボランティアスタッフの皆さんとで、おそらく歴代のステージ発表の中で最も難しいこの曲に挑戦した。ストレッチ・呼吸法からみっちり始める練習時の妖しい(?)光景は、いつしか「シンドゥー教」と呼ばれるようになっていた。

余裕はない。でも淋しさもない。忙しいなりの、不思議な連帯感が生まれている。準備にたっぷり時間をかけて、本番も長時間を要した「旅立ちの集い」だったけど、驚くほどあつという間に(実はもう7回目なのでこの「あつという間かげん」にもそろそろ慣れてきたのだけだ)お別れの時はやってきた。生徒と写真を撮り、握手し、手を振り...気づけばやっぱり走っている。懇親会場はもう一丁先らしい。

淋しさを感じないことが淋しい、とも言えるけど、春にはこういう忙しさが案外よく似合う。学生時代、春休みは一年で最もヒマな時間で、エネルギーを蓄えてたのかくすぶっていたのか分からなかった。でも、自由が丘の春は次につながっていく季節だと実感できる。それが節目であることを実感

するのは、きっともう少し先、新しい生活にずいぶんなじんだ自分を見つけたときだろう。「この気持ちはなんだろう」、その答えが、ちょっとだけ見えたりもするかもしれない。
笑い感動の懇親会は、タンバリンの舞い飛ぶカラオケでお開きとなった。お父様もお母様も、実にエネルギー。このパワーに支えられてなら、きっと次の一年も自由が丘は輝き続けるはず。淋しさよりも希望が胸にともる、春の宵だった。

174 寂しさと次の一歩 杉野建史 2007.04.03

3月24日土曜日。高等部のスタッフ3人は2次入試のために朝から出勤した。午後4時、入試検討会議も終了し帰宅できると思いきや…。こんな時期まで3期生(卒業生)が2名残って学習に取り組んでいた。

翌日は『2006年度第2回3期卒業式』で、3月4日に卒業認定が間に合わなかった生徒のための卒業式の日だ。新年度入学生の書類などの整理や、翌日の準備。3月25日は超過密スケジュールで、卒業式 父母懇談会 送別会と息つく間もないほどのハードな予定が組まれていた。その準備に追われながら最後の個別授業を2人の生徒に行った。その中心は言わずもがな担任の田房さんと、私と畑中氏は横から救いの手をしばしば差し出すだけであった。それでも自分が出した課題が済んでいないことを告げられ、手取り足取りとたばたで何とかクリアさせることに成功した。(本当はこの後に、さらに一波乱二波乱あったのだが、それは色々な人の名誉のために伏せておきます。)

2人の生徒が帰宅の途につきほっと一安心。3人で顔を見合わせて「最後の最後まで本当にお疲れ様でした」と落ち着いた。安心感と共に何とも言えない寂しさが…。「もう此奴らとこうやって勉強することはないんだな」と思うと、最後の最後までよく頑張ったという気持ちと「最後までおまえ達とこうやって関わられたことを幸せに思う。関わらせてくれて有り難う」という気持ちでいっぱいになった。

ふと思うことがある。「俺はおまえらがいるから学校に来られる」と。

2006年度の全ての業務を終えたことにして、2007年度の準備に取りかかる。自分の気持ちも整理して次年度に向かう。3期生の諸君、寂しいけれど行ってらっしゃい。自分の足でしっかりと歩きなさい。そのための準備はこの学園で十分にやってきたのだから心配ない…はず。過去を悔やむのでなく、未来を憂うのでなく、今を生きなさい。

またここで会おうな。全員で会おうな。

175 学園の新しい体制 亀貝一義 2007.04.04

今年度から学園の執行体制を補強する。これまで私が学園の「代表」名目の立場を務めていた。時には「代表」であったり、「学園長」であったり、法人の立場を言わなければならないときには「理事長」であったりした。

今年度(4月)より、杉野建史さんが「学園長」の仕事を務める。私は、NPO法人でいえば理事の一人(登記上は3理事のうちの筆頭)であるが「理事長」職を行う。必要に応じて学園を代表する仕事をするが、学園のいわばソフトの部分の総括は杉野さんが担う。最年少の学園長として活躍することだろう。

畑中紀世彦さんが退職する。彼は、ボランティア活動を含めて3年弱の間わが学園で働いてくれた。非常に有能なスタッフの一人であった。彼なくしてはなしえなかったことも多々あった。そういうことは誰もが知っているから本当に惜しい人だというのが一致する評価である。札幌自由が丘学園での活動を通して更に新しい人生への飛躍を誓っている。数年間専門学校に在籍して医療系の仕事をするという抱負をもってこれからの臨む予定とのこと。彼の鹿島立ちを衷心から激励したい。

畑中さんの後任にあたる常勤スタッフの一人として迎えることになった人はやはり2年間のボランティア活動を経験した椎名結実(しいなゆうみ)さん。彼女は4月から公立中学校の教師になることが求められていたが、わが学園にシフトしてくれた。労働条件の違いなど公立学校のそれと比べると

問題にならない。「常勤」といってもいわばボランティア活動の延長に近い。北大のある教授に話したら、驚いて「どうして？ もったいない！」と口走った。「そういう言い方はないんじゃないか」といっていさめたが、だいたい大方はそういう感想だろう。

札幌自由が丘学園には椎名さんに限らずスタッフは皆そういう人だと思う。学校であれば(なんでもそうなのだが)決め手は「人」だ。「風林火山」で有名な武田信玄のモットーは「人は石垣、人は城」であったという。

わが教師たちは一丸となって、教育の本道を目ざす。

176 教師の評価 杉野建史 2007.04.05

先日2006年度の全ての学園活動が終了した。色々な気持ちが整理されないまま、寂しさを抱えたままの心である。でも、私たちは次年度に向けて気持ちを新たに、全てのことに真摯に取り組まねばならない。

私たち教師がどのようなことを生徒と共に活動したか、その結果生徒がどのように成長したのか。生徒が今一步の挑戦をし、以前の自分よりもほんの少しでも「自分で成長できた」と実感できたのか。その都度自分で振り返り会議でもスタッフが互いに評価しあう。

私は“教師の評価”を行う時、次の3つの評価を重要視しなければならないと思う。『教師同士の評価』『生徒からの評価』『保護者からの評価』。この他にも他校での教育実践や諸外国での教育実践を多分に学習し分析しながら自分たちを振り返る作業(評価)が大切である。誤解をして頂きたくないが、恐れずに言うならば、生徒からの評価だけでは子ども本位になりすぎる(子供の様々な要求と、子供本来のわがまま)。また、保護者だけの評価だけでも偏ってしまいますことがある(社会に出て役立つ事を親は要求する傾向が強い場合があり、役立たないものは必要ないと短絡的になることもあると思われるからである)。

しかし、教師は謙虚でなければならない。自分に対する評価をきちんと受け入れ分析する態度を忘れてはならない。謙虚であると同時に強い信念を持ち子供や保護者、場合によっては社会と向かい合う必要がある。このバランスが崩れた時「教師の評価」は墮落する。

私は37歳の年で亀貝先生から学園長を引き継ぐ。経験不足は否めなく、誰から見ても頼りなく感じるだろう。社会的に見ても異論があるだろう。でも、「最年少での学園長」が私の夢だった。それは管理職と呼ばれる教師が教師集団と忌憚なく意見を言い合い、高め合う学校は必ず良い学校になるとこれまでにお会いした校長先生を見て強く感じたからである。

学校評価と教師の評価は、私たち教師への『通知表』であり学校運営の道標の1つになる。自分に対する教師としての評価を私はこれまで以上に厳しく客観性を持ってしていかなければならない。

177 江原啓之 芳賀 慈 2007.04.06

先日、スピリチュアルカウンセラーの江原啓之が悩みを解決するという番組で、「家には住んでいる人の念がつく」というようなことを言っていた。引っ越したときは掃除をすると前の人の念がとれるらしい。ほんまかいなと思いつつながら、彼の番組は気にして見るし、本まで買って読んでいる自分がいる。

本当にできるものなら話をしてみたい故人は、きっと誰にでも1人や2人いるだろう。彼が一気に有名人になったことから、反響の大きさが想像できる。番組には夜中にカーテンの開け閉めの音が聞こえるという主婦が出ていた。それは多感な息子のなせる技だということだが、これまた「？」である。ただ、霊的な現象は勝手に起きているのではなくて、感じる側にも原因があるという話を聞いて少し納得した。

私自身、そこにはあり得ない話し声や物音をはっきりと聞いたり感じたりするときがある。頭にもやがかかっているような状態で、何かをきっかけに普通のクリアな状態に戻る。ある特定の場所へ行くといつも感じるのだが、それはきっと自分で感じる準備をするからなのだろう。

「死んだ人は怖くない、生きている人の方がよっぽど怖い」とかつて夜中のトイレを渋る私に周りの大人が言っていた。さすがにトイレはもう怖くないけれど、何かを感じる瞬間はやっぱり今でも怖い。

178 スタッフエッセイを書く 椎名結実 2007.04.14

スタッフとして初めてスタッフエッセイを書くことになった。スタッフエッセイと言えば、毎月苦勞して書いていたHさんを思い出す。その姿を見ながら、いったいここにはどんなことを書いたらいいんだろうかと、なんとなく考えていた2年間だった。まさか自分の番が回ってくるなんて。

そうそう、昨日は高等部の始業日だった。新2年生と新3年生がやってきた。ボランティアではフリースクール部の様子しか分からなかったので想像するだけだった高等部の生活が、昨日生徒が来て初めて、何となく見えかけてきた。それから昨日は演劇部の初日。出席したのはたった3人だったけど、今年度はもちろん、来年度、そしてその先の演劇部のことをみんなで話した。一緒に何年越しの夢を持ってるって、常勤スタッフの特権だろう。

明後日発表になる自分のクラスの生徒たちとも、そのようにして一緒に夢を描いていきたい。

179 挑戦者 田房絢子 2007.04.19

先日、高校の時の友人が九州の山奥に隠居したと人づてに聞いた。なんでも、犬の競技の第一人者がいて(なんという競技かはわからないけど)、修行に行ったそうだ。しかも3年計画。すごいねえ～、サバイバルだねえ～などと言っていたら、給料が食費程度しか出ないと聞き、また驚きを隠せなかった。そんなわけで、食糧難のその友人はインターネットを通じて、救援物資をお願いしているそうだ。それを聞き、スーパーで買い物袋2ついっぱいにして食料を送った。

もともと犬の世話をする仕事についてはいたが、それにしてもかなりの挑戦者だと思う。昔から人とは違うことを好み、人とは違う生き方をしていた友人だった。どこかいつもハングリー精神を持っているというか、身軽というか、いつも行動力に溢れていた。今回の修行だって、終えたときに何かがあるわけでもなく、資格が得られるわけでもなく、ただ彼女の犬好きが発展して、やらずにはいられなくなったのだろう。何もない場所で、師と仰ぐ人のもとで、大好きな犬たちと戯れ、苦勞も多いだろうが、やはりそれは彼女にとって何物にも代え難い生活なのだろう。

今、私には親や友人に別れを告げて、譲れない何かのために旅立つ勇氣はあるだろうか。何物にも代え難いものを追いかけて続けることができるのだろうか。アメリカへ行くと旅立った過去の自分を思い出し、そんな事を考えてみた。

あの頃はものすごいエネルギーを発散していたんだろうなあと、ちょっと懐かしくなった。それに比べると、挑戦する気持ちというのが落ち着きすぎてしまったようだ。

さあ、我が友人を見習って、今年はずっといろいろな事に挑戦していこう！

180 「初めての…」 杉野建史 2007.04.20

2007年4月。学園の2007年度がスタートした。

フリースクール部と高等部の入学式で学園長として初めて「挨拶」を経験した。

まだまだ尻の青い未熟者であるが、一生懸命考え諸先輩方からアドバイスをいただきながら、生徒とともに活動していきたい。いわゆる普通の学校の校長先生とは年齢が大分違う。年齢が違うということは経験も大いに違う。では、その差をどうやって埋めるか!?当然埋められるものではない。しかし、埋めるべく努力することが必要であるし義務であると考えている。経験が少ない分だけたくさんの方に取組まなければならない。年齢が若い分、体力はあるのであらゆる事に挑戦し経験を倍の速さで増やしていく決意である。

新任教師のようにこの1年間の全てのことが学園長として初めてのことになる。失敗も成功も全て自分の責任である。私の尊敬する人が「どんなに小さい船の船長でも、船上で起こったこと責任は

船長にある。でもこのことを本当に実感するために最初は一人で船に乗れ。このことは社会の中で生きていく上でおまへのプラスになる」と話してくれた。この言葉は私の心に強烈に残っている。だからというわけではないが、数年前からヨットを始めた。一人乗りなので全ての責任は私にしかない。「あの人がこうだったら...」とか「みんながきちんとすれば...」とか、言い訳はできない状況である。

「初めて」のことは極度の緊張をともないそれがストレスになる。入学したての生徒を見て「大丈夫かな」と心配になる。大人になっても緊張が解けるまでに時間がかかることもあるのだから、子供なら時間がかかって当たり前であるが、極度のストレスにならないように担任をはじめとしてスタッフ全員でサポートしていきたい。五月病の予防接種もそろそろ始めなければ...

初めてのことに緊張感を持ちつつ一生懸命取り組んでいく。

頭を柔らかく、確固たる信念を持って。